MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2007.3
第24号

ただ金だけが笹井の目的だった

『連環』
昭和37年11月 講談社

現在入手できる本
『松本清張全集』第12巻 文藝春秋
『連環』講談社文庫 講談社

作品紹介

笹井誠一は南栄堂という九州北部でも大きな印刷所で経理をしている。東京で就職して三年目、会社の金を使い込み、解雇されて逃げるように九州まで流れてきた。初めは、店主・豊太郎の強烈な人格や独特の運営方法に当惑するが、信頼を植え付けて店の金を持ち逃げする機会を狙うようになる。手っ取り早く金を得て東京に戻りたい笹井は、店の出納を握る店主の妻・滋子に目をつけた。滋子を誘惑し意のままにすると、今度は豊太郎が邪魔になり、殺害に及ぶ。

滋子から遺産の一部を引き出すと、笹井は、東京へ戻りその金で高級アパート暮らしを始める。そこで出遭った和久田という男から贅沢な暮らしのからくりを聞き、いかがわしい出版事業に飛びつく。しかしそんな笹井に、南栄堂の職長だった笠山や、滋子の存在が纏わり付く。思い余った滋子が息子の一郎と上京するが、笹井は、もはやただのお荷物となった二人を見捨てることしか考えていなかった。

金儲けを確信し、欲に目が眩む笹井の前に、思いがけず笠山が一郎を連れて現れた。利用していたはずの人間からも裏切られ、あっという間に足場からすべてが崩壊し、笹井は錯乱状態へ陥っていく……。

（学芸員　柳原　暁子）

目次

●前期企画展関連講演会
風間 完を語る―アトリエの父・食卓の父― …… 2
●松本清張研究会第十五回研究発表会 …… 4
●展示品紹介 …… 5
●清張原風景「点描」 …… 5
●企画展紹介「松本清張の印刷所時代」 …… 6
●探検！清張記念館 …… 6
●みんなの広場 …… 7
●友の会活動報告 …… 7
●トピックス …… 8

前期企画展関連講演会

風間 完を語る

―アトリエの父・食卓の父―

風間 正 ＋ 大津はつね

企画展「『天保図録』挿画展　風間完が描く江戸のひとびと」に関連し、講演会を行いました。

ご子息の風間正さんと大津はつねさんのご夫婦は、ともに映像作家としてご活躍中で、生前の完先生と寝食を共にされ、芸術家としても先生のことをご理解なさっています。おふたりを講師に、藤井康栄館長がナビゲーターとなり、トークショー形式で進行しました。

生前の完先生が出演された貴重な映像を軸に進めることになり、大きなスクリーンのある企画展会場を急遽改装して講演会会場としました。完先生の原画に囲まれての講演会となりました。

平成18年10月28日（土）
松本清張記念館企画展示室

館長　この企画展内で上映中の完先生のアトリエ風景の映像もお二人が作ってくださったものですが、今日も別の映像を準備してくださいました。

正　父の絵はご存知でも、父の顔はご覧になったことがない方もいらっしゃるかと思い、生前出演した番組を編集しました。父がどういう人間だったかを、映像を見ながら話せたらと。まず初めにこちらをご覧下さい。

○ヨーロッパの鍵を紹介
（八十三年ＮＨＫ「おはよう広場」より）

古い鍵を並べて見ていると、イマジネーションが湧いてくるような気がします。素朴なものは素朴なりに綺麗でしょ。しかも鍵は実用品です。伊達や酔狂で作っている訳ではなく、使うもの。だから強さがある。女の人の顔でも、強くないといけない。世の中の苦しいことに耐えて美しくなった人というのは強い。少女には少女の美しさがあるけど、そういう強さはないかもしれない。

僕の描く女の人はモデルはいません。いいところだけ集めてきた顔です。綺麗な人をちらっと見て勉強するんです。

館長　こんなに先生が能弁なのは大変珍しいですね。お話する時もぽつぽつと昔話のように話されて。お家でもそうでしょ？

正　家でもそうでした。「強くないと」「苦労してないと」というフレーズは端々にありました。でも苦労していてもダメなものはダメとも平気で言うし、子供の頃の私にはよく分からなかった。

はつね　お会いするまでは美人画と聞いて綺麗な華やかなものだけを想像していたんですね。でも単に美しいものを写し取っているのではなくて、空気とか女性の動きとか微妙な線とか、そういったものを描いてらっしゃるんだと衝撃を受けました。家ではとても寡黙で、下手にお話をすると「黙っていることも必要なんだよ」と言われたりしましたね。勘所を見つけてお話をしたり質問したりして、色んな事を学ばせて頂きました。

館長　ご本人は控えめに仰るけど、大事にされたお嫁さんなんです。今日着ていらっしゃるブレザーも完先生のものということで、正さんと三人で着ていらっしゃったとか。先生はとても好みの難しい方でしたよね。

はつね　夕食でも食材を指して「旅のものかな」と聞かれるんで

「おはよう広場」より

風間 正（せい） ＋ 大津 はつね

風間　正氏は、明星大学情報学部教授。芸術学博士。

大津はつね氏は、東京工芸大学芸術学部助教授。

1981年「ビジュアル・ブレインズ」を結成、映像作家として活動を開始。

マルチメディアを駆使した作品を発表するとともに、ディレクターとして様々な映像制作を手がける。

現代メディア社会を風刺した作風は世界各国で高い評価を受けている。

すが、何のことだか最初は分からなくて。外国の品種のものか、日本のものかということなんですね。

正　落語みたいに「おーいはつね、その貝は何だい」「貝です」って答えて怒られるんですね（笑）。

はつね　だんだん形、色、匂いで買ってくるんですけど、完先生は「味見してきたのかい」って（笑）。服に関しても、ちょっとしたフィット感が大切で、値段ではないんですね。このブレザーも未だに冬場に着ています。

○アトリエで話す先生

（八十六年日本テレビ「美の世界」より）

（沢山の資料について聞かれ）この資料は挿画をやっていたものですから。挿画というのは三日四日で新聞社や出版社に届けなければならないんです。これができるかできないかが、プロであるかないかということだと思うんですね。たとえば二つ病院が出てきたら、看護婦さんの制服も描き分けねばならない、時間内で。だから資料も増えてきました。

挿画のほかに、キャンパスにも向かいます。仕事ではない自分だけの絵を描くことで、イラストの仕事でも、絵に力が付いてくると思うんですね。作品というのは力です。焼き物でも何でもそうですが、いいものは質と形に力があります。力のあるものは人を惹きつける。

「美の世界」より

館長　「力」とは非常に抽象的ですが、小説でも文章でも皆同じだなと思いますね。

正　服や食べ物の話と同じで、好みだけではない何かがあるのかな、と感じます。板前さん大工さんの仕事でも「力である」と言っていました。ある意味、芸術論ではなく極めて職人的な事を大事にしたということですね。また、直感的なことでもあるのかと思います。

はつね　何でも見透かされてしまうようなところがあり、いつも緊張の連続でした。気を遣うというよりも、真剣勝負のようなことを望んでいらっしゃるところがありました。しっかり見るとかしっかり物事を捉えるとか。顔の話も「ちらっと見る」なんて仰っていますけど、実は瞬間的に全部を捕まえるということをなさっていたと思います。生活の場の中でも非常に緊張感をもって、様々な人の顔の資料を見ながら、いろいろ呟いていらした記憶があります。

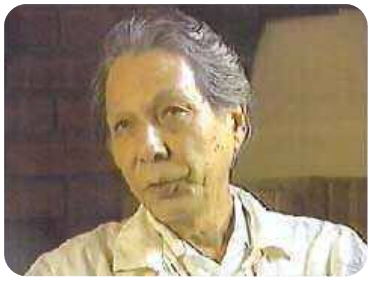
○猪熊弦一郎さんの絵を紹介しながら

（八十七年テレビ東京「私と宝もの」より）

私の宝物はこの猪熊弦一郎さんという人の絵です。僕の先輩で沢山教わりましたが、一番深く教えられたのは、画家としての姿勢ですね。大家として世の中から優遇されるようなところからいつもちょっと離れて。猪熊さんはいつも固い椅子に座って絵を描いていらっしゃるようで、それが芸術家として立派な姿勢だと思うんですよ。でもいつも未来の方をしゃきっと見ている。

はつね　先生ご自身は食卓では文字通り固い椅子を好まれていたことを思い出します。とても固い椅子でご飯を召し上がっていました。

正　先ほどの「力」とか、「強さ」「固い椅子」という、言葉にするとこういうキーワードでした。先ほどのように「美人画のモデルはいるんですか」とインタビューされても、いつも合成だと答えていました。「アトリエの父」というと、ずっとこういうイメージですね。食卓でもそういう父。だからロジックがきちきちとあるというよりも、キーワードのイメージが膨らむことを重要視していましたね。



「私と宝もの」より

館長　それが芸術家かもしれませんね。

正　父は整理の仕方も独特で、他の人が見ても分からなかった。でも肝心の挿画は、整理はだめなんですよ。

館長　「昭和史発掘」の挿画も八百枚以上あるんですが、ばらばらになっていたんですね。文春を退職後伺って整理したらとても喜んでくださって。ただ自分の仕事の後始末が気になっただけなんですが、しばらく経って先生が思いがけず「これは記念館に」と仰って。あまりに嬉しくて、「昭和史発掘」の挿画展をしました。記念館ではほかに「点と線」の映像化にあたって原画を描いて頂きました。その原画を収めた「点と線」が出版されたのが刺激になって、ぜひ風間先生に菊池寛賞を、という話に繋がったんです。

正　凄く晩年なんですけど、受賞を喜んでいましたね。「俺にもちょっとは、いいことあるかな」なんてぽつっと言ったり。

館長　私も終生完先生にお世話になった感じで、有難いと思っています。

正　この企画展「天保図録」の挿画を描いたあと、父はＮＨＫの「おはなはん」のタイトル画を毎週描いていたんですね。僕は当時小学生で非常に父親を誇らしく思っていました。この「おはなはん」の最後は、おはなはんの息子が彼女の一生を書いてヒットし、ドラマ化された第一回を彼女自身が見るところで終わる、という劇中劇になっています。このラストは僕自身の心境と重なるんですね。親父の仕事を残していきたい気持ちがありますが、ずっと「力」「固い椅子」って何だろうと考え続けています。

そしてこのドラマの最後には「完」と出ますが、子供心に「親父はここにいるんじゃないか」って思った訳です。

松本清張研究会

第15回研究発表会

日時:平成18年12月2日(土)午後2時～
会場:立教大学　10号館　X301教室

今回は初めて研究発表三人という形で行いました。会員及び一般参加者など合わせて、約五十名が参加。三人の発表はそれぞれ独自の視点から清張文学に切り込み、質疑応答も活発にくり広げられました。

松本清張と鷗外

――最後の推理小説『両像 森鷗外』の手法

金子幸代　富山大学人文学部教授

【発表要旨】

『両像 森鷗外』は遺作評伝と言われているが、自分としては最後の推理小説という立場で考えていきたい。二重の時間軸「私」の時間と「鷗外」の時間」時刻の推移があり、疑問の連鎖もあり、推理小説仕立てになっている。

『両像 森鷗外』の中で清張はどのような鷗外像を蘇らせたかを見ていくと、鷗外の下積み時代をたどる作業が清張にとっても幸福な時代であったのではないか。そして、この『両像 森鷗外』を書く行為の中で清張自身も自分の文学営為を見詰めなおす時間を持ったのではないか。そういう意味で、最後の遺稿となった『両像 森鷗外』は清張自身の集大成と言えるものではないか。

会場風景

〈悪女〉の語り方

――清張文学のアキレス腱

菅　聡子　お茶の水女子大学教授

【発表要旨】

〈悪女〉の分析を通してその存在に共通する要素として、反社会性、過剰性（過剰な欲望、過剰な野心など）を挙げ、そのような過剰性が男性社会の要請していた「あらまほしき女性像」からは逸脱しており、男性中心社会の安寧と秩序を脅かすため、最終的には処罰されると言う。

『黒革の手帖』の主人公、元子のそもそもの欲望「（高い壁に囲まれた檻からの脱出）」は、店とお金を騙し取られ流産までしてしまうほどに罰せられなければならない欲望かと問う。この作品において懲罰の対象は、横領という犯罪ではなくこの脱出したいという欲望である。そして、小説が社会の潜在的欲望、無意識の欲望を言語化し具象化するものであるならば、この清張作品のミソジニー（女性憎悪）、あるいは女性への懲罰は、作品の書かれた時代の日本の社会の女性に対する眼差しをそのまま写しとったものと言える。

松本清張における鳥居龍蔵

――官学に対抗する狷介不羈で不遇な在野学者像

南　富鎮　静岡大学人文学部教授

【発表要旨】

松本清張の「断碑」や「笛壺」、「石の骨」「火の路」などには「官学に対抗する狷介不羈で不遇な在野学者」が登場する。これらの人物造型について、従来の先行研究では個別の作品によるそれぞれのモデルに由来するとされてきた。しかし、本発表では「官学に対抗する狷介不羈で不遇な在野学者」の像が先に存在し、それが個別の森本六爾（「断碑」）や直良信夫（「石の骨」）らに投影されているとする。そしてその原型的な人物像が鳥居龍蔵であるとし、各作品に投影された鳥居龍蔵の像を指摘した。つまり、松本清張が描いている一連の不遇な在野学者像には鳥居龍蔵の人物造形が大いに盛り込まれているとする。

質疑応答では、「すべての作品に鳥居龍蔵が投影されているとすれば、すべての作品が同じものになるのではないか」というような疑問が呈された。これについて発表者による「もしも投影されていないとすれば、清張はそれぞれ個別の人間を同じ人物のように類型化したことになるのではないか」といったような反論がなされた。

展示品紹介

扇風機

松本清張が不況の最中に就職したのが川北電気企業社の小倉出張所である。高等小学校を卒業した年、父に連れられ職業紹介所に行き紹介された。当時、清張は痩せて顔色が悪く「青」というあだ名もあったくらいだった。工員の口は多かったが、勤まらないと思い給仕の職についた。

扇風機は、川北電気企業社の主力商品であった。黒のボディに黒のプロペラ、真中にＫＤＫの印がある。清張は「半生の記」で〈川北電気というのは、主に電熱器と扇風機を造っている会社だったが、そのほかモーターも売り出していた。ＫＤＫというのがそのマークで、扇風機は業界ではトップレベルではなかったかと思う。扇風機に付いているガードと称する、あの渦巻型の鉄線は、川北電気の新案特許になっていて、そのスマートさから、これだけは日立や明電舎、安川電機などをずっと抜いていた。〉と書いている。それもそのはずで、この扇風機は、国産初の扇風機としてどこよりも先駆けて開発されたものだった。大正六年、若かりし頃の松下幸之助が、扇風機の碍盤（がいばん）を川北電気から注文され、まだ十四歳の井植歳男（のちの三洋電機社長）と製作し、会社発展の運が開けたという逸話がある。この時の開発技術の連携は現在の松下エコ・システムズ株式会社に受け継がれ、ＫＤＫ製品は中近東や東南アジアで広く愛されている。また、インドネシア、マレーシアでの社名として今も生きている。

川北電気企業社は現在、川北電気工業株式会社として後続している。当館に展示してある扇風機は、川北電気工業株式会社九州支社の応接室に保管されてあったものを、平成六年、北九州市が譲り受けたものである。この時のいきさつは川北電気工業の社報（第一三〇号 平成八年八月）の古賀哲三氏の「松本清張と川北電気」に詳しい。

川北電気に就職しわずか三年で失職するが、この時期は清張にとって、大人未満の猶予期間であり、読書に耽ることもできた多感な時期でもあった。エッセイ等にはその読書体験が記されている。また、橋本多佳子が住んだ櫓山荘に扇風機を運んだ思い出を綴っているものもある。小説では「河西電気出張所」、「泥炭地」など、フィクションだが、川北電気の風景が投影されている。清張の少年時代の一ページである。

（学芸員　柳原　暁子）

清張原風景 点描

中島（なかしま）

「その年の暮から、父は橋の上に立って塩鮭（しおざけ）の立ち売りをしはじめた。それは市場から帰る客を目当てにしたものだが、市場のものよりはいくらか安かったとみえ、予想外の商売になったらしい。／このことから、ようやく奥田家の間借りから解放され、私たちは中島という市外地のみすぼらしい借家に移った。」（「半生の記」）借家があった中島は、もとは紫川（むらさきがわ）と神嶽川（かんたけがわ）に挟まれた三角州で、葦（あし）の生えた沼地を埋め立て、紫川の中の島の形をなしていたことにちなんでこう呼ばれたと言う。清張は、借家を「骨壺（こつぼ）の風景」の中で、一つの板壁の小屋を家主が二軒の貸家に分け、一軒が六畳と板の間しかなく、出入口の戸を開けたらすぐ前に二軒共用の便所があったと記している。

「小倉（こくら）の中島にあるバラックの家の前には、白い灰汁（あく）の流れる小川があった。近くの製紙会社から出る廃液の臭気が低地に漂っていた。しかし、住んでみると、その悪臭を嗅（か）がないと自分の家でないような気がした。学校がひけて、その灰汁の臭う橋まで帰ると、私ははじめてわが家に戻ったような気安さを覚えた。」（「半生の記」）

中島橋（風の橋）

清張の尋常小学校時代、中島には株式会社小倉製紙所が建っていた。この製紙所は、総煉瓦造り約五千三百坪（敷地は約二万八千坪）で、工業用水は紫川の河水を利用しており、北九州の工業化に貢献してきた。後の大正十三年には王子製紙と合併し、昭和二十四年に十條（じゅうじょう）製紙小倉工場と改称した。現在は工場を廃止している。清張が「骨壺の風景」で、工場の廃液が住吉神社横の堀川を通り紫川に注いでいたと記しているように、当時は百尺（約30m）の煙突から煙がもくもくとあがり、大量の廃液が紫川に流れ込んでいた。清張にとって、工場廃液の臭いは懐かしい生活圏の香りである。

現在、中島には大正6年操業の北九州を代表する企業の一つである東陶機器株式会社（ＴＯＴＯ）が本社を置いている。また、紫川は、水処理技術や下水道工事の進歩、市民と行政が一丸となった浄化活動により、美しい水質の川に蘇っている。（碇　政幸）

大正8年小倉市街地図
（国立国会図書館所蔵）

現在の小倉市街地図

会期延長 5月6日まで

「松本清張の印刷所時代――プロフェッショナルへの道」

平成十八年度後期企画展を、好評につき平成十九年五月六日（日）まで延長開催することになりました。

まだご覧頂いていない方のために、展示の一部をご紹介します。この機会に、会場まで足をお運びいただけたら幸いです。

清張がデザインした日本舞踊のパンフレット
（昭和12年）高崎保夫所蔵

『昭和拾壹年秋季競馬番組』
（昭和11年11月
社団法人小倉競馬倶楽部発行）
印刷・高崎印刷所
表紙の文字が清張の筆跡と思われる

松本清張　印刷所時代年譜

昭和二年（十八歳）
不況により就職先の川北電気企業社小倉出張所が閉鎖。職を失う。

昭和三年（十九歳）
小倉市（現北九州市小倉北区）の高崎印刷所に石版印刷の見習職人として就職する。月給は十円程度。この年さらに別の小さな石版印刷所の見習いとなる。

昭和四年（二十歳）
三月、友人のプロレタリア文芸誌購読による"アカ狩り"の余波を受け、小倉警察署に留置された。父に蔵書を焼かれ読書を禁じられる。

昭和五年（二十一歳）
徴兵検査を受け第二乙種補充兵。

昭和六年（二十二歳）
勤め先の印刷所がつぶれ、高崎印刷所に戻る。

昭和八年（二十四歳）
福岡市の嶋井精華堂に出向き、半年間修行する。

昭和九年（二十五歳）
高崎印刷所に戻る。

昭和十一年（二十七歳）
月に四、五十円と多少職人らしい給料を取るようになる。十一月結婚。年末に高崎印刷所の主人が亡くなる。

昭和十二年（二十八歳）
二月、自営に踏み切る。十月、小倉に新築移転した朝日新聞九州支社の広告部意匠係臨時嘱託として広告版下を書き始める。

きよしとハルコの 探検！清張記念館

屋外 "テラスの石畳"の巻

ハルコ　桜が見ごろになったわね。

きよし　小倉城の石垣と記念館の石畳によく映えるなあ。

ハルコ　この石畳は鉄平石といって長野からとりよせた石なのよ。薄い層になっているので、タイル状に貼る使い方が多いみたいだけど、積み重ねたものをさらに階段のように組んだ使い方はここが初めてなんですって。
建築家は採石場まで直接足を運んでこのイメージにたどり着いたそうよ。

きよし　取材を大切にした清張が聞いたら喜びそうだ。

ハルコ　この話には後日談があってね。
・・・記念館が完成してから建築家は初めて知るの。
実は清張は長野の同じ山に考古学の取材に来て、鉄平石のことも知っていたんですって。

きよし　なんという偶然！いや、そんなレベルじゃないな。

ハルコ　鉄平石がとりもつ不思議な縁というところかしら。

きよし　僕もこの石にインスピレーションを感じるんだ。
・・・ミルクレープ食べたい。

ハルコ　はいはい、あとで喫茶「石の館」でね。

これも出逢い。品切れの場合はご容赦ください。

記念館ができるまで長年土に埋もれていた小倉城の石垣、2,400万年の眠りから覚めた火山岩・鉄平石、そして松本清張。出逢いは複雑にからみながら見せる、見事な調和。来館の際にはどうぞお気軽に散策してみてください。

みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、記念館を訪れてみての感想を掲載しました。

- 学生の頃よく読んでいました。推理小説ばかりと思っていましたが、認識を新たにしました。（50代・鹿児島・男）
- 貴重な展示物それぞれを興味深く拝見致しました。又、来てみたいと思います。（20代・千葉・男）
- 松本清張氏の自宅を再現していて、おどろきました。展示物も分かりやすく整理されていて良かったと思います。清張氏についてより深く知ることができて満足です。（20代・市内・女）
- 松本清張の書庫、書斎を見られてとてもよかったです。多彩な本の種類に、自分ももっとたくさん本を読まなければと思いました。（10代・山口・女）
- 名前は知っていたが、どんな生涯を送ったとかまでは知らなかったのでよい勉強になりました。これから、色々な清張さんの本を読んでいこうと思いました。（20代・県内・女）
- TVで推理小説のドラマを見て、記念館にも行き、もっと松本清張について知りたいと思っていました。知らない作品もたくさんあって、また本も読んでみたくなりました。（30代・県内・女）
- 次は家族を連れてきて見せたいと思った。知らない作品がたくさんあったり、作家自身の生いたちも知れて、来て良かったと思いました。（20代・広島・女）
- 清張作品はまだ数冊しか読んでいませんが、これからできるだけ多くの作品を読みたいと思います。今日は来館できてよかった。ますます好きになりました。（20代・県内・女）

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見をご紹介しております。
清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。
皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

● 生誕祭（12月22日（金）：参加者53名）

今回の生誕祭では、平成18年11月1日に開館した北九州市立文学館の見学会を行いました。文学館では、北九州の文芸のあゆみを紹介するとともに、郷土ゆかりの文学者の自筆原稿など貴重な資料を展示しています。この日の参加者には遠方から訪れた会員もおり、文学館に対する関心の高さが感じられました。館内見学後は、文学館の佐木隆三館長による講演があり、文学館の概要などについてお話ししていただきました。

友の会会員募集！！

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。
会費は、8月から翌年7月までの1年間で3,000円となっております。

■友の会事業
- 講演会、シンポジウム等の開催
- 映画ビデオ等の上映会の開催
- 読書会、文芸講座等の開催
- 会報の発行
- 松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

■会員特典
- 常設展の招待券（年間4枚）進呈
- 企画展（年2回）のご招待
- 記念館主催事業のご案内・参加
- 記念館広報誌（館報）・企画展図録進呈
- 友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- 友の会オリジナルグッズの進呈（加入年度のみ）
- 喫茶「石の館」（記念館内）の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

研究誌『松本清張研究』第八号　まもなく発刊

年一回発行の『松本清張研究』は、全国の第一線研究者を網羅し、さらなる研究の推進と後継者の育成を目指しています。創刊準備号から数えて九冊目となる第八号をできるだけ早く皆様に販売できるよう、現在急ピッチで作業を進めております。出来上がり次第、記念館ホームページでお知らせいたしますので、もうしばらくお待ちください。

特集　清張とメディア……時代との遭遇

制約なき思考者――鶴見俊輔　清張を語る
聞き手　加藤陽子＋編集部　藤井康栄、宮田毬栄）

モダニスト松本清張
――マスメディアとの相互関連性をめぐる研究　宗像和重、十重田裕一

メディア・コミュニケーション・レトリック
――松本清張『点と線』　日高昭二

松本清張のメディア戦記（仮）　土屋礼子

「採集」する身体（メディア）へ
――「清張」、小倉そして民俗学（仮）　重信幸彦

時代との遭遇――週刊誌創刊時代の松本清張（仮）
半藤一利＋佐野洋＋郷原宏

"ジャーナリスト"松本清張さんの一面
――カストロ首相との対談をもくろみ、キューバへ飛んだ一九六八年の記憶
岡崎満義

なお、バックナンバーは好評発売中です。当記念館でも通信販売をしておりますので、ご利用ください。

- 創刊号……一、五〇〇円
- 二号～五号、七号……各二、〇〇〇円
- 六号……二、二〇〇円

松本清張記念館

入館者80万人達成

平成19年1月18日、記念館の入場者が80万人に達しました。80万人目となったのは、福岡県筑紫郡那珂川町在住の松村照美さんで、弟さんと2人で入館されました。記念館には初めて来たが、まさか80万人目になるとは思わなかったと非常にびっくりされた様子でした。松村さんには、認定証と記念品が贈呈されました。

●編集後記●

昨年11月、北九州市立文学館が開館しました。当館から歩いて5分程の所にありますので、併せてご観覧下さい。さらなる文化創造都市となるように当館も努力していきます。

（碇　政幸）

2006年度・ドラマ化された清張作品

2006.5.9	「共犯者」	日本テレビ
2006.7.19	「強き蟻」	テレビ東京
2006.9.8	「蒼い描点」	フジテレビ
2006.12.27	「波の塔」	TBS
2007.1.19～3.9	「わるいやつら」	テレビ朝日
2007.1.30	「地方紙を買う女」	日本テレビ

イラスト：山藤　章二

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL　093(582)2761
FAX　093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作　(株)エディックス

●開館時間　午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
●休館日　年末（12月29日～12月31日）
●観覧料　一般／500円（400円）　中・高生／300円（240円）
小学生／200円（160円）　（　）は30人以上の団体
●アクセス　JR：小倉駅から徒歩15分　西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車）
車：北九州都市高速、大手町ランプより5分